Thinking Rugby 2002　No.1

ラグビー進化論からプロ化と未来へのイメージを拡げる

ラグビーは「生き物」であるという言葉の意味は深いものがあります。

進化論をラグビーにあてはめて議論されるのを聞くことが久しく有りませんが、種の起源についての説は、ルール変遷の道筋を理解し、ラグビーの将来を考察するのに欠かせない論拠を提示してくれます。ダーウィン学説の中心的な柱は自然淘汰説です。その頃、英国では、生物進化論と並んで社会進化論も唱えられています。ラグビー自体もそのルールも、突然変異によって発祥・形成されたものではありません。

ラグビーはボール競技の一つとして、固定的概念と伝統を重んじる反面、長い間に渡って、ルールやそれに伴うプレーや作戦は、毎年の如く変遷を繰り返してきました。ラグビーを考えるとき、これらの両面の合体した組み合わせ構成の妙を理解しなければなりません。ラグビーは生き物だから「進化」するという筋道は、ラグビーの現在および将来を考えるのに重要なことです。

ルール改正に当たって、「プレーが先」というのも、生きている一面を表すものです。即ち、進化の過程にあるプレーがあって、それを定型化するものとしてルール改正があるのですから、改正は突然のものでなく自然な流れに沿ったものです。この意味でも進化という表現が適切なのです。もっとも重要なことは、変化を生み出すエネルギーです。そのエネルギーを吸収し発散して、変化を生み出す、即ち変化と同時進行しているチームが強いチームとして勝ち残ることができるのです。ルール改正の出来上がった条文を解釈して、そのプレーを真似るだけでは、到底ルールの精神を具現できないし、先進国の後を追うのが精一杯で、追い着いた時には、すでに次の変化がどんどん進行してしまっているのです。そこでルールを「正確に」に守るということがプレヤーの課題となるのです。

日本にとって急務であるプロ化についても、進化の過程の一コマとして考えねばなりません。世界動きからの遅れを取り戻すためには、プロ化についての認識を高める必要があります。外国がやっているからとか、アマチュァリズムが廃止になったからという話ではありません。いつごろから、何のために、世界的にプロ化が進んでおり、にもかかわらずそれらについての理解が不足していることが問題なのです。コラムでも問題を提起しましたが、一向にその論点や視点についての議論の輪が広がりません。一部の人が考えるべき問題として打ちやってしまっているからでしょう。これは内容からいってもそうではなく、ラグビー界あげての問題なのです。上意下達が定型化した封建制的風潮のもとでは議論が高まらないようです。発想を転換して、議論と協力の方法を考えてみる必要があると思います。プロ化についての論点視点の重複をさけますが、根本的に検討を加え、遅れを取り戻すことが期待されます。

プロ化は日本代表チームの問題で、一般のチームに関係のない事ではないのです。ラグビーの普及発展を考えるという場合、目の前の相手に勝つ方法とか、望ましい指導法とかいろいろな分野があります。それらの基盤になくてはならないものとして、ラグビーの本質を把握し、未来を思索することが重要なのです。望ましいラグビー像を描き、将来的に満足しうるように、日々のラグビー生活の自信と充実を計ることが、人生にとって大切であることを忘れてはならないのです。人間の本能と自由・創造から挑戦へと思索を拡げていきラグビー進化論より明日へイメージを拡げることが大切です。

ラグビーは人間が作りだした生き物で、変化していくものです。競技規則も人間が楽しむためのものであり、改善するに当たって、楽しいということと、明日へ希望があることが要件になっているのです。発祥と普及発展の過程がそれを如実に物語っています。ヒューマニズムあふれる人間くささがラグビーのアイデンティティでもあります。プレーが変化し、ルールが改正されていくのも、突然に起こるものではありません。時代の流れにそって人間の心が基盤になっているのです。戦争と平和や環境の変化や科学文明と生活状況に影響されて変遷即ち当然且つ必然的変化をとげるわけです。その過程を論証する進化論：「この世に生き残るものは、最も強いものではない。最も頭の良いものでもない。変化に対応できる生き物である」。

弱肉強食の世界で生き残ったのは、最強のものではかったのです。生きた化石がそれを物語っています。そっくりラグビーにあてはめてみると面白い。ラグビーは時代の変化の流れに対応しながら、変化に対応して、楽しいスホーツとして普及発展し生き延びてきました。これからも永遠に生き延びて行くことでしょう。また、試合のプレーの形態も作戦も、変化に対応できるものだけが生き延びることができるのです。そして、それが一番強いものとしてリードしていくのです。W杯にその変遷をみることができますが、最近はSuper 12やTri-nations のゲームに時代を先取りしたものが感じられます。先進国の形骸に追い着いたと思ったときにはすでに変化しているのです。変化に負けないためには、後進性を打破し、ただ真似て学ぶだけでなく、ラグビーの今日と将来を見通す努力も必要です。

後を追いかけているだけでは、追い着いた時に他はさらに一歩先を進んでいるのです。いまあなたが楽しんでいるラグビーをお蔵に仕舞ってはなりませんし、死なせてしまってはなりません。そのために、ラグビー進化論を考察することによって、変化の行く先と対応の過程を推考することも、ラグビーを楽しむ一つの道である。勝利に結び付く作戦にもいうことができます。

ラグビー発祥から今日まで、挑戦・創造の歴史が物語るように、発展する強いチームは常に新しいことを取り入れて、他より一歩先を行くチームです。新しいことが年を経ると一つの伝統として残存します。ただその時に新しいからよいのではありません。新しいことで他を越える力があったものが、残るべくして残っていくのです。それはラグビーの変化の先を行くことであって、変化をリードするエネルギーがチームの強さの源泉なのです。

そうすることは、また大変楽しいことでもあります。人の知らないことを知っているということは優越感にもなります。劣等感から力は生まれません。

プロの定義と意義を明確にし共通理解していなくてはなりません。プロとは、professional＝職業的という意味で、professionalism によるものです。職業選手気質（身分）を呼ぶものです。give and take 即ち、報酬を受けそれに見合うものを提供する関係にあるのです。報酬に見合うだけの時間と労力を費やして（give）フイットネスと鍛練に務め、高度の体力と技能と精神力を高め、その成果をプレーと試合でデモンストレート（誇示する）し、それによって進化の度合いを高めることによって未来に向けての変化を作り出していくことを責務としているのです。

そして、大衆に夢と希望を与えることが、報酬に見合うものです。報酬の計算（組織・形態）が先になされるのでなく、結果に報酬がついてくるというのがプロ本来のあるべき姿です。

プロ化については、その歴史はハングリー精神が不可欠であることを物語っています。一つの競技でプロ化するにあたっては、絶大なエネルギーが注がれました。自然で必然的なものではありません。個人の競技に対する技能の欲望と、自己のプレーに対する評価と努力に対する報酬への欲望を意識するようになり、行動を起こし、システムとして定着させる努力が重ねられた結果の産物です。例えば賞金もなく男子に女性差別をうけてきた女子プロテニスの世界を切り開いたビリー・ジーンズ・キングは、女子テニスにも賞金が出されることに実力をもって主張し活動して実現した結果、女子テニスは一段と発展しました。困難を切り開く卓越した力の発揮なくしては成りませんでした。原動力となる個人の力についての感覚に対する認識が大切です。例えばあるスポーツで、コーチとプレヤーが動くとき、荷物を持つのはプレヤーであって、縦の人間関係だけが重要視され、報酬は次のことと考えるのが普通になっています。人間関係とは別の金銭関係については、プロ野球が盛んな割に割り切られておらず、交渉がトラブルのように取り上げられています。スケートの清水選手、マラソンの有森選手、それに続く高橋選手へと、プロとしての競技活動の道をひらいています。団体競技でも、サッカーがひとつの道を開いています。

ラグビー愛好者が集まってチームが結成され、学校や大学に取り入れられ、企業が厚生事業としてチームを結成したりするものより、プロチームは作為的に明確な目標と手段をもって、強力な推進力のもとに結成されるチームです。大阪弁でいう、「銭のとれるプレヤー」の自覚を持ったプレヤーの集団です。大リーグの本塁打王マグワイアが引退を表明しました。「報酬に見合うレベルができない。チームのため、ファンのために退く義務がある」という引退の言葉はプロ根性を物語っています。

ラグビー普及発展のために、プロのスタープレヤーの誕生が待たれます。スターチームの華々しい活躍が夢を与えてくれるでしょう。世界の動きの後をゆっくり追いかけるだけでは、進化

し続けるラグビーについていくだけがせいいっぱいで、日本ラグビーの花はいつまでたっても咲かないのではないか。そんな危惧を吹き飛ばしてほしいものです。

2002.01.12
西川　義行